



映画「女ひとり大地を行く」のはなし

朴 順子

歴史を文字だけで理解するのは難しい。特に自分が生きた時代の出来事ではない場合、そこに生きた人々の思いや考えに近づこうとしても到底及ばない。人の顔が見える物語や映画、さまざまな出会いは、辻褃の合う思考へと軌道修正してくれる。それは、平面が立体に、バラバラなものがひとつに繋がっていく貴重な機会だ。

薦められて、映画「女ひとり大地を行く」を YouTube で観た。その制作過程から内容に至るまで驚き感動した。

ウィキペディアによると、映画は日本炭鉱労働組合北海道地方本部とキヌタ独立プロダクションとの共同制作によるもので、脚本決定稿は新藤兼人だが他に、職場作家千明茂雄、石田政治、松岡しげる、とある。炭鉱労働に従事した作家なのだろうか。

監督は亀井文夫、1908年生まれ、福島県相馬の出身で1941年、治安維持法違反容疑で検挙、投獄を経験している。

出演者は、山田五十鈴、宇野重吉、岸畑江、北林谷栄、桜井良子、神田隆、織本順吉、内藤武敏、花沢徳衛、加藤嘉、他。

1953年2月20日に初公開されたが、映画倫理委員会が朝鮮戦争を連想させる数か所を削除、あるいは訂正を希望。日本炭鉱労働組合が抗議、対立したが、164分が137分に短縮されて上映されたそうだ。

何よりも驚いたのは制作資金を炭労北海道地方本部加盟の炭鉱労働者が一人33円ずつ出し合い300万円を集めたということ



だ。経費削減と役作りのため、スタッフは1952年9月下旬から11月中旬にかけて、夕張や釧路の太平洋炭鉱や雄別炭鉱にて長期ロケを行ったという。山本五十鈴は炭鉱長屋に寝泊まりして地元住民と交流したそうだ。映画の制作者と俳優、炭鉱労働者の熱い思いが感じられる

描かれている時代は1932年から1952年。1930年、世界恐慌のあおりを受けて、昭和恐慌が発生、倒産が相次ぎ失業者が町にあふれた。とりわけ農村は壊滅的な打撃を受けた。映画は秋田から多くの娘たちが売られていくシーンから始まる。娘たちの涙を乗せて汽車は駅を離れる。

昭和7年冬、農夫山田喜作（宇野重吉）は生活苦のため妻サヨ（山田五十鈴）と二人の息子を残して北海道の炭鉱へ。見送る道端の掲示板には「娘身売りの場合、當相談所へ御出下さい」と張ってある。夫から

の仕送りが途絶え、借金の返済を迫られたサヨは子どもたちを連れて炭鉱へ。夫は亡くなったと聞かされ、子どもの教育のため炭鉱夫に・・・と、ストーリーは展開する。

地を這う暗闇の炭鉱で過酷な労働に明け暮れる日々、いったん事故が起きると助かる命も犠牲に。戦争に駆り出され、増産に増産の掛け声の下、日本人も朝鮮人も中国人も死は日常の中にある。だが苦しみを共にする人々の連帯は大きなうねりとなり、人間らしい温かい交流は生きる力となる。主人公サヨは吹き荒れる風にさらされながら息子たちを守って力強く生きる。だが長年の無理がたたって床に臥す日も多くなる。息子は願いを込めて母に語りかける。

「せめて一日だけでも働く者の世界に変わった明るい世で母ちゃんに暮らしてもらいたいんだ」と。その時、明るい歌声が近づいてくる。

赤いチョゴリで働く乙女／
のどかな畑に歌声あふれ
今年も豊作 黄金のうねり／
豊かな朝鮮 自由な朝鮮

口ずさんだこともある歌なのに曲名も知らない。ふと、誰が作詞作曲したものかと調べてみた。朝鮮の歌を日本語に訳して歌っているとばかり思っていた私は本当に驚いた。

「青年歌集・第1篇5 曲名：建設 相沢治夫作詞・花井稔作曲」

ハバロフスク抑留者たちが朝鮮民主主義人民共和国の樹立を祝って創作して収容所内にいた朝鮮人たちに贈った歌である。帰国後、1949年11月27日東京の日比谷公会堂で「帰還者楽団」（団員40余名）第一回公演で発表された。1950年5月、楽団名を「楽団カチューシャ」とし、1954年1月「音楽舞踊団カチューシャ」に変えて、ロ

シア音楽の普及に努める。33年間に4000公演、観客数450万人に達し1984年解散した。」とある。

映画の中の炭鉱労働者も、うたごえ運動を推し進めてきた人々も、未来への希望を高らかに歌いながら共感しあったのだろう。「豊かで自由な朝鮮」は今も「願い」のまま・・・。

夫、喜作も戻り 家族は再会を果たしがサヨは旅立つ。労働環境や待遇の改善を掲げて炭鉱労働者たちは立ち上がる。若者の隊列が意気揚々と歌声高らかに進みゆく。

若者よ 身体を鍛えておけ
美しい心がたくましい身体に
からくも支えられる時がいつかは来る。
その時のために身体を鍛えておけ
若者よ

(作詞：ぬやま ひろし(西沢隆二)
「詩集 編笠」 1946年発表)

一本の映画が、私が生まれる前の世の中を映し出してくれる。触れることがなかった多くの事実を教えてくれる。その時代の人々の思いや願いが生き生きと伝わってくる。大地に根を張り、次世代の幸せを願って逞しく生きた母や女たち。その長い道のりの延長線上に今の暮らしがある。

人や本や映像と出会う中で新たな関心が生まれ、多方面にアンテナが立つ。そしてまた、新しい出会いが生まれる。指一本で操作できるスマホは多くの疑問に答えてくれる。しかし、なぜかすぐに忘れる。人との出会いは国を超えて、歴史の記述を超えて、一様ではないあり方に気づかせてくれる。そんな出会いが私の人生を豊かにしてくれている。